

練習に対する動機づけが、選手の心理的要求の充足、 目標志向、練習態度に及ぼす影響

—— ソフトボール部員を対象とした研究 ——

たなかきほ*1・いうちのぶえ・くぼたとよし*2・うえだひろゆき
田中希穂*1・井内伸栄・久保田豊司*2・上田博之

1. 目 的

スポーツ領域において、動機づけは古くから盛んに研究が行われてきた分野であり、これらの研究を大別すると、達成動機と参加動機の2つの観点から検討されている。達成動機は、Atkinson¹⁾の認知的な枠組みの概念を用いた研究が中心であり、これはMcClelland²⁾の達成欲求の概念に基づいている。近年では、Hater³⁾のコンピテンス動機づけの理論を適応した研究も盛んである⁴⁾。

一方、参加動機に関する研究は、非理論的なものが多い傾向にあった。そこで、1990年代以降、参加動機と理論的な観点との結び付けが試みられた。参加動機に対する理論的なアプローチは、主に自己効力感の概念と目標理論の概念を適応したものが大半である。自己効力感とスポーツ動機づけの関連では、高い効力期待がスポーツ活動への意図的な従事を動機づけるという報告のように⁵⁾、自己効力感がポジティブな動機づけを促進する傾向がある。目標理論の観点からスポーツ動機づけにアプローチしている研究では、課題志向性(task orientation:あるいは熟達志向性(mastery orientation))と自我志向性(ego orientation)の2つの目標志向性を主に検討している。課題志向は、知識の増大とコンピ

テンスの獲得を目標とし、以前よりもできたかどうかという基準に基づいて熟達感を求めている。

一方、自我志向は、自己の能力や自己価値(self-worth)を高めるためにコンピテンスへの好ましい評価を得ることとコンピテンスへの好ましくない評価を避けることを目標としている。これら2つの目標志向性の違いは、異なった動機づけを導くとされている。具体的には、課題志向が高いほど、新しいスキルの学習が促進され⁶⁾、高い参加動機を示し^{7,8)}、コンピテンス知覚が高い傾向がある⁹⁾。しかし、自己効力感からのアプローチも目標理論からのアプローチも、根底ではコンピテンス(ある種的能力知覚)を扱っているものであり、動機づけられた行動の開始に関連する他の要因を取り扱っていない。そこで、内発的動機づけに関する中心的理論である自己決定理論の観点からスポーツ参加動機を検討することによって、コンピテンスに加えて自律性と関係性の概念を取り扱い、より包括的な枠組みが提供できると考えられる。

スポーツ動機づけと自己決定理論とを関連づけた研究はまだ少ないが、主に2つの観点からの研究がある。1つは、外的統制の内発的動機づけに及ぼす影響について検討したも

*1 同志社大学文学部 (Doshisha University)

*2 大阪国際大学人間科学部 (Osaka International University)

のである^{10,11)}。これらの研究は、報酬やフィードバック、競争状況などと、内発的動機づけの促進・阻害との関連を検討している。

もう1つは、どのような動機づけのタイプが参加動機を促進するのかに焦点を当てたものである。子どもを対象とした Goudas, Biddle, & Fox¹²⁾ や Chatzisarantis & Biddle¹³⁾ では、体育の授業に対してより内面化された動機づけを持っている生徒は、自由な時間にスポーツやエクササイズに従事する傾向が高いことを示した。また、大学生を対象とした Pelletier, Fortier, Vallerand, Tuson, Briere, & Blais¹⁴⁾ は、自己決定感の程度が高い動機づけは、コンピテンス知覚と努力知覚と正に関連し、注意散漫とは負に関連することを示した。

学業領域で発展した Academic Motivation Scale (AMS)¹⁵⁾ をスポーツ領域に適応させた Sports Motivation Scale (SMS) を用いた研究では、内発的動機づけと高いコンピテンス知覚との正の関連を報告している。また、コーチが、自律性支援的であることや、情動的なフィードバックを提供することなどが、内発的動機づけを促進することも示唆されている^{16~19)}。

本研究では、スポーツ領域における自己決定理論の適応可能性を検討し、ソフトボール部員の練習に対する動機づけが、選手の心理的要求の充足や、目標志向、スポーツに対する姿勢などに及ぼす影響を検討することを目的とする。学業領域における研究結果および先述の先行研究より、スポーツ領域において、次のような関連が予測される。スポーツ参加において、自己決定的に動機づけられている人は、満足感やコンピテンスの知覚が高く、課題志向的であり、その活動への積極的な従事を示す。対照的に、あまり自己決定的でない動機づけを持っている人は、満足感やコンピテンス知覚が低く、その活動が長続きせず、活動への従事は消極的である。

2. 方法

2.1 被調査者および手続き

本研究では、大阪国際女子大学ソフトボール部に2001年の調査時に在籍していた部員40名(1年生21名、2年生9名、3年生6名、4年生4名)が調査の対象となった。ミーティングなど、選手が集合する場所で、監督(コーチ)が質問紙を配布し、その場で回答を求めた。

2.2 測度

動機づけ: 練習に対する動機づけを測定するために、Pelletier *et al.*¹⁴⁾ の Sports Motivation Scale (SMS) の28項目を翻訳した。この尺度は、学業領域で発展した AMS¹⁵⁾ をスポーツ領域に適応できるよう修正を加えたものであり、フランス語版や英語版ではその妥当性がすでに確認されている。“なぜあなたは練習に取り組むのですか?” という質問に対して、各項目が当てはまる程度を6段階で回答する形式であり、自己決定理論に基づいて、3つのタイプの内発的動機づけ、3つのタイプの外発的動機づけ、および無力状態を測定している。

内発的動機づけとは、純粋に興味や楽しみを感じるから練習に取り組んでいる状態であり、その目的によって3つのタイプに分類されている。知ることへの内発的動機づけ(*intrinsic motivation to know*)は、探求することや好奇心と関連し(例: 私が取り組んでいるスポーツをさらに理解することに楽しみを感じるから)、物事を完遂することへの内発的動機づけ(*intrinsic motivation to accomplish things*)は、コンピテンスを感じ、新たな業績を得ることと関連している(例: 自分の弱点を改善するときに喜びを感じるから)。また、刺激を経験することへの内発的動機づけ(*intrinsic motivation to experience stimulation*)は、刺激的な経験や熱中感などを体験することと関連している(例: 活動に

完全に没頭しているという感覚が好きだから)。

外発的動機づけは、自己決定感の程度に基づいて3つのタイプに分類されている。自己決定感が高く、最も内発的動機づけに近い動機づけ状態である同一視的調整(identified regulation)は、自分自身にとって重要な目標を達成するための手段としてスポーツに取り組んでいる状態である(例:自分自身の他の側面を成長させるために、私が選んだ最良の方法の1つだから)。続いて、取り入れ的調整(introjected regulation)は、不安や罪悪感など、内面的なプレッシャーのために練習に取り組んでいる状態であり(例:自分自身に満足するためには、スポーツをする必要があるから)、最も自己決定感の低い外的調整(external regulation)は、罰や賞など、外的なプレッシャーによって練習に取り組んでいる状態である(例:アスリートであるという名声のため)。

また、まったく練習に取り組もうという気持ちがなく、内発的にも外発的にも動機づけられていない状態である無力状態(amotivation)は、個人の行動と結果との間の関連性が知覚されなかった場合に陥る状態である(例:はっきりわからない、私はスポーツに向いていないとつくづく思う)。田中²⁰⁾は、大学の体育会に所属する大学生231名(男性148名、女性83名)を対象に、確認的因子分析を用いて尺度構成を検討した結果、SMSのフランス語版や英語版と同様に7つのタイプの動機づけを確認した。また、 α 係数は、知ることへの内発的動機づけ(4項目)が.77、完遂することへの内発的動機づけ(4項目)が.72、刺激を経験することへの内発的動機づけ(4項目)が.71、同一視的調整(4項目)が.75、取り入れ的調整(4項目)が.69、外的調整(4項目)が.72、無力状態が(4項目)が.76であり、SMSの日本での適応が可能であることが示されている。

心理的要求:自己決定理論では、動機づけに影響を与える要因として、生得的で普遍的な人間の基本的・心理的要求を3つ仮定している。①コンピテンスへの要求は、自分を有能である、能力があると感じたいという要求であり(例:一般的に、私は自分が試みることに於いて、有能であると感じる)、②自律性への要求は、自分が主体的に選択した行動を行いたいという要求である(例:私は、自分が何かをしているとき、自分の考えで行動を選択することができる)。また、③関係性への要求は、他者との間に親密な関係や絆を感じたいという要求である(例:私は、普段人と関わっている中で、自分に近く、密接な人がいると感じる)。本研究では、これら3つの要求の充足の程度を測定するために、Sheldon & Elliot²¹⁾の作成した3項目に、独自に作成した6項目を加えた。評定形式は6段階であった。田中²⁰⁾は、探索的因子分析によって尺度構成を検討した結果、3つの要求に相当する因子を抽出した。また、 α 係数は、コンピテンス要求(3項目)が.87、自律性要求(3項目)が.80、関係性要求(3項目)が.85であり、尺度の妥当性が確認されている。

目標志向:選手の目標志向性を測定するために、Task and Ego Orientation in Sports Questionnaire (TEOSQ)²²⁾の12項目を翻訳して用いた。ここでは、課題や競技そのものに着目し、課題やスキル(技術)の熟達など個人的な進歩を目指す課題志向(例:何か新しいことを習うことによって、さらに練習をしたいと思ったとき)と、他の選手と自分自身を比較し、自分の高い能力を示したり、他者よりも優れたパフォーマンスを示したりする、あるいは他者よりも劣っていることを明らかにしないことを目指す自我志向(例:友達よりもよくできたとき)の2つの目標志向性を測定している。質問紙は、“どのようなときに満足感を感じますか?”という質問に対して、各項目がどの程度当てはまるかを6段階

で回答する形式であった。田中²⁰⁾は、探索的因子分析の結果、2項目を分析から除外し、2つの目標志向に相当する2因子を抽出した。また、 α 係数は、課題志向性(5項目)が.79、自我志向性(5項目)が.86であり、尺度の妥当性が確認されている。

スポーツに対する姿勢：スポーツに対する姿勢を測定するために、Taikyoku Sports Motivation Inventory (TSMI)²³⁾から8尺度、45項目を抜粋した。評定形式は6段階であった。原因帰属に関しては、成功や失敗の理由として、努力(例：相手に勝ったり、記録が伸びたりするのは、能力や素質よりも、努力によるものだと思う)、能力(例：試合の結果には、個人の能力が反映されると思う)、運(例：勝敗の決め手になるのは、能力よりも時の運である)がどの程度関わっているかを測定した。

コーチとの関係性に関しては、コーチの指導や助言をどの程度信頼し、素直に受け入れ、コーチに頼っているかを示すコーチ受容(例：試合運びがうまくいくのは、コーチの指示がよいからだと思う)と、コーチとの間の人間関係が親密ではなく、感性的にじっくりしていないと認知している程度を示すコーチ不適応(例：コーチに対して反抗心を感じる)を測定した。

競技に対する態度に関しては、練習意欲、知的興味、困難の克服、精神的強さ、勝利志向性を測定した。練習意欲は、日常生活における練習の位置づけや練習にどの程度の意欲を持って打ち込んでいるかを示す(例：暇な時間があれば、練習をするべきだと思う)。知的興味は、目標を達成する手段として利用するための客観的な情報をどの程度強く求めているか、つまり、スポーツに関してどの程度強い知的関心を持っているかを示す(例：自分の種目について書かれている本は、積極的に読んでいる)。困難の克服は、困難な状況に直面したり、失敗を経験したりしても、

くじけたりあきらめたりせず、それを乗り越えて努力できる程度を示し(例：困難なことに出くわしたとき、すぐに他のことに移るより、それを乗り越えようと努力する)、精神的強さは、失敗や敗戦など精神的に落胆しやすい場面において、どの程度くじけず、投げやりにならないでいられるかを示す(例：自分より強い相手であっても、気おくれするようなことはない)。勝利志向性は、勝負に勝つということにどの程度高い価値観を持っているか、勝つことにどの程度執着心を持っているか、つまり、勝利をどの程度目指しているかを示している(例：スポーツは、楽しむことより勝つことに意義がある)。

田中²⁰⁾は、原因帰属・コーチとの関係性・競技態度ごとに探索的因子分析を行い、5項目を分析から除外した結果、各下位尺度に相当する因子を抽出した。また、 α 係数は、努力帰属(4項目)が.78、能力帰属(4項目)が.72、運帰属(2項目)が.85、コーチ受容(5項目)が.74、コーチ不適応(4項目)が.87、練習意欲(5項目)が.77、知的興味(4項目)が.81、困難の克服(3項目)が.74、精神的強さ(5項目)が.83、勝利志向性(4項目)が.79であり、尺度が妥当であることが確認されている。

3. 結果と考察

3.1 動機づけの高さに基づく選手の種類

各尺度に含まれる項目の平均値を算出したものを尺度得点として分析に用いた。まず、40名の選手を、動機づけの程度に基づいて分類するために、Ward法による非階層的クラスタ分析を行った。その際、3つのタイプの内発的動機づけ尺度の得点の平均値を算出し、単一の内発的動機づけ尺度を構成した。クラスタリング変数には、内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れの調整、外的調整、無力状態の5つの変数を用い、クラスタ数を2に指定した。分析の結果、クラスタ1

には24名が、クラスタ2には16名が所属した。各群の動機づけ得点の平均値および標準偏差をTable 1に示す。

Table 1 各群における動機づけの平均値(M)および標準偏差(SD)

	高群 M (SD)	低群 M (SD)
内発的動機づけ	4.27 (0.56)	3.04 (0.76)
同一視的調整	4.30 (1.13)	3.17 (0.79)
取り入れ的調整	3.51 (0.92)	2.95 (0.77)
外的調整	2.09 (0.95)	1.81 (0.82)
無力状態	1.53 (0.64)	1.69 (0.76)

次に、2つのクラスタの特徴を検討するために、*t*検定を用いて動機づけ得点を比較した。その結果、クラスタ1はクラスタ2よりも内発的動機づけ($t=5.94, p<.001$)と同一視的調整($t=3.72, p<.001$)の得点が高く、また、取り入れ的調整の得点も高い傾向にあった($t=2.00, p<.10$; Figure 1)。これらの動機づけのタイプは、いずれも行動を起こさせるタイプの動機づけであり、クラスタ1に所属している選手は、クラスタ2に所属している選手よりも、練習に対して内面化された目的を持ち、積極的に行動を起こしていると考えられる。そこで、クラスタ1を動機づけ高群、クラスタ2を動機づけ低群とした。また、外的調整と無力状態に関しては2つの群の間に

有意な差が見られなかった。これは、調査対象が大学の体育会系クラブに所属しており、その段階で選手は外的プレッシャーによって練習に取り組むのではなく、ある程度の目的意識ややる気を持っているためだと考えられる。

3.2 動機づけの高さが心理的要求の充足、目標志向、スポーツに対する姿勢に及ぼす影響

練習に対する動機づけの程度の違いが、選手の心理的要求の充足、目標志向、およびスポーツに対する姿勢に及ぼす影響を検討するために*t*検定を用いて各尺度における動機づけの高群と低群の得点を比較した。なお、各群における尺度の平均値および標準偏差をTable 2に示す。

心理的要求の充足

心理的要求の充足に関しては、動機づけ高群の方が低群よりも自律性要求の得点が高く($t=2.04, p<.05$)、また、関係性要求の得点も高い傾向にあった($t=1.90, p<.10$; Figure 2)。つまり、選手の意見を聞き入れ、選手の自主性や選択権を重視することによって選手の練習に対する動機づけを高めることができると考えられる。Deciらの一連の研究においても、心理的要求が満たされることによって動機づけが高まったり、状況に適応したり、心理的な健康状態がもたらされたりすること

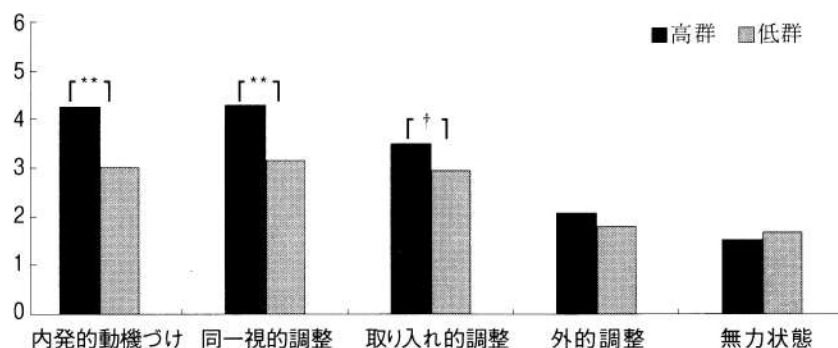


Figure 1 各群の動機づけの得点
(*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$)

Table 2 各群における心理的要求・目標志向・スポーツに対する態度の平均値(*M*)および標準偏差(*SD*)

	高群 <i>M</i> (<i>SD</i>)	低群 <i>M</i> (<i>SD</i>)
心理的要求		
コンピテンス要求の充足	2.19 (1.06)	1.85 (0.84)
自律性要求の充足	3.47 (1.20)	2.69 (1.18)
関係性要求の充足	4.10 (1.12)	3.38 (1.25)
目標志向性		
課題志向目標	5.21 (0.70)	4.53 (1.20)
自我志向目標	4.03 (1.08)	3.25 (1.62)
コーチとの関係性		
コーチ受容	4.38 (0.77)	3.88 (0.95)
コーチ不適応	1.32 (0.39)	1.30 (0.37)
原因帰属		
努力帰属	4.92 (0.83)	4.31 (0.93)
能力帰属	2.99 (0.89)	2.77 (1.07)
運帰属	2.58 (1.13)	2.66 (1.18)
競技態度		
練習意欲	3.61 (1.08)	3.44 (1.18)
興味	4.48 (1.16)	4.13 (1.15)
困難の克服	4.62 (1.00)	3.66 (0.91)
精神的強靱さ	3.07 (0.97)	2.86 (1.37)
勝利志向性	3.50 (1.28)	3.45 (1.06)

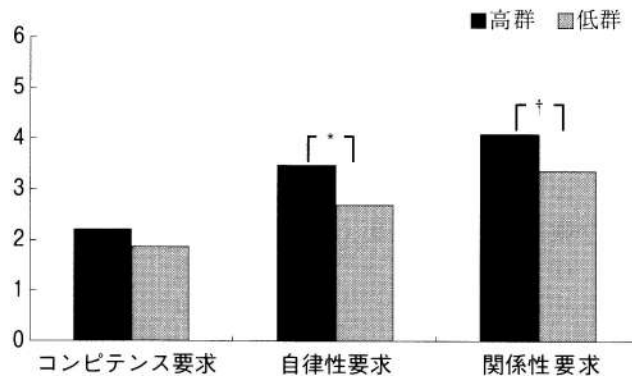


Figure 2 各群の心理的要求の得点

(*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$)

が指摘されていることから²⁴⁾、心理的要求を選手が満たすことができるような環境や雰囲気設けることによって選手の練習に対する動機づけを高めることができると考えられる。

目標志向

高い動機づけは、競技そのものに対する個人的な進歩に着目するような目標を導くことが示唆されており^{7,8)}、本研究でも予測どおり、動機づけ高群の方が低群よりも課題志向

目標の得点が高い傾向にあった($t=2.05, p<.10$; Figure 3)。つまり、動機づけの高い選手は、競技そのものに対する個人的な進歩に着目し、適切な行動や高い成績を導くような目標を持つ傾向にあることが示唆された。しかし、動機づけ高群は同時に自我志向目標の得点も低群よりも高い傾向にあった($t=1.82, p<.10$)。これは、スポーツ競技では、能力を示すことによって実力が評価される、他者との競争状況が避けられないということが大きく影響していると考えられる。つまり、練習に対する動機づけが高い選手は、さまざまな目標を持ち合わせ(多目標)、それらの目標を達成するためにさまざまな努力をしていると思われる。

スポーツに対する姿勢

原因帰属:原因帰属理論²⁵⁾によると、負けた理由が努力不足によるものだという認知は、つまり次回は努力すれば勝てる可能性があるという考えを導き、無力感に陥りにくいとされている。一方、負けた理由が能力不足によるものだという認知は、能力を短期間で向上させることが不可能であることや、潜在的な能力は変化しにくいという考えから、次回もまた負けるだろうという考えを導き、あきらめや無力感を生み出す可能性が高いと言われている。また、勝敗を運に帰着することは、今回の結果が偶然と考えるため、次回の結果を予測できない状態を導く。

本研究において、動機づけの高群と低群に

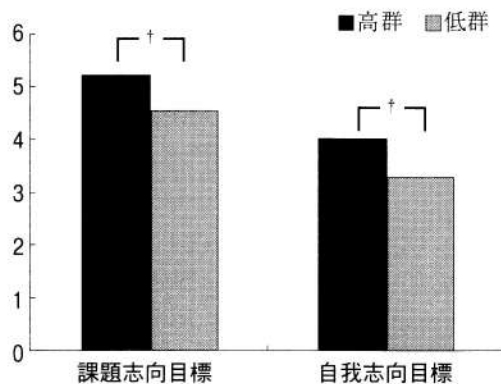


Figure 3 各群の目標志向の得点
(*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$)

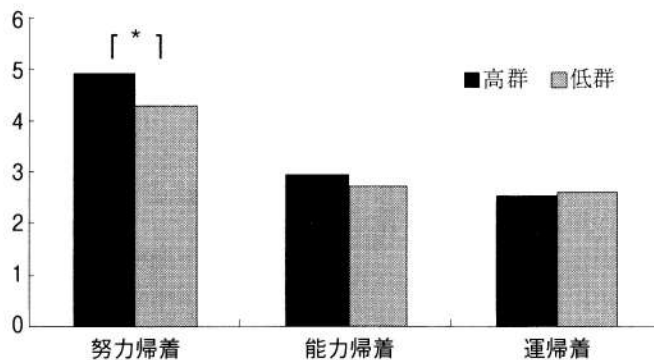


Figure 4 各群の原因帰属の得点
(*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$)

おける原因帰属の得点を比較した結果、努力帰着において有意な差が見られた($t=2.17$, $p<.05$; Figure 4)。つまり、練習に対する動機づけが高い選手は、勝敗の原因を努力に帰着する傾向が、動機づけが低い選手よりも強く、そのため無力感に陥りにくいと考えられる。

コーチとの関係:監督やコーチとの信頼関係の構築は、スポーツ競技に取り組む際の動機づけや能力向上、あるいは成績に大きく影響する。本研究では、動機づけの高群の方がコーチ受容の得点が高い傾向にあった($t=1.83$, $p<.10$; Figure 5)。つまり、練習に対して高い動機づけを持っている選手は、監督やコーチとの間に信頼関係が構築され、自分自身の目標達成のための手段の1つとしてコーチからの指導やスキルの伝達を捉えている

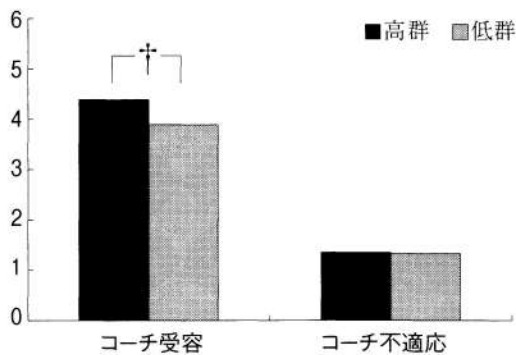


Figure 5 各群のコーチとの関係の得点
(** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$)

のではないかと考えられる。

競技に対する態度:動機づけの高群と低群の競技に対する態度の得点を比較してみると、困難の克服の得点において、動機づけ高群の方が動機づけ低群よりも有意に高かった($t=3.089$, $p<.01$; Figure 6)。つまり、動機づけの高い選手ほど、困難な場面に直面したり、失敗を経験したりしてもあきらめたりくじけたりすることがなく、その状況を乗り越えようと努力すると考えられる。また、全体的な傾向として、練習意欲や知的興味、精神的強靱さにおいても、動機づけ高群の方が動機づけ低群よりも得点が高いことから、選手の動機づけを高めることによって、競技に対するより適応的な態度が導かれることが示唆される。

4. まとめ

以上のことから、スポーツに対する高い動機づけは、基本的・心理的要求の充足や、勝利にこだわりながらもスキルの向上を目指すことや、努力重視、そしてコーチとの良好な関係性を導くことが示唆された。このように、自己決定理論の立場からスポーツに対する動機づけにアプローチし、選手の動機づけ状態および認知的・感情的状態を把握することは、競技に関する指導上、有用だと考えられる。また、選手の動機づけ状態を測定するために、すでに海外でその妥当性が検討されて

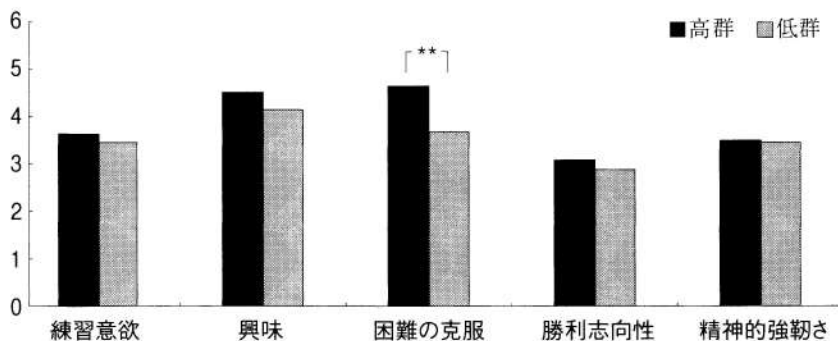


Figure 6 各群の競技態度の得点
(** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$)

いる SMS の日本での適応が可能であると思われる。しかし、本研究では、このような選手の動機づけ状態がもたらすパフォーマンスの違いにまでは言及できていないため、今後は選手の実際のパフォーマンスを含め、スポーツに対する動機づけのより包括的な検討が必要であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) Atkinson, J. W. : The mainstream of achievement-oriented activity. In J. W. Atkinson and J. O. Raynor (Eds.), *Motivation and achievement*, New York : Halstead, pp. 13-41 (1974)
- 2) McClelland, D. C. : *The achieving society*, Oxford : Van Nostrand, 林 保 (監訳), 達成動機 - 企業と経済発展に及ぼす影響, 産業能率短期大学出版部 (1961)
- 3) Hater, S. : Effectance motivation reconsidered : Towards a developmental model. *Human Development*, **21**, 34-64 (1978)
- 4) Wong, E. H., & Bridges, L. J. : A model of motivational orientation for youth sport : Some preliminary work, *Adolescence*, **30**, 437-449 (1985)
- 5) Feltz, D. : Gender differences in the causal elements of self-efficacy on a high avoidance motor task, *Journal of Sport Psychology*, **10**, 151-166 (1988)
- 6) Dweck, C. S. : Motivational processes affecting learning, *American Psychologist*, **41**, 1040-1048 (1986)
- 7) White, S. A., & Duda, J. L. : The relationship of gender, level of sport involvement, and participation motivation to task and ego orientation, *International Journal of Sport Psychology*, **25**, 4-18 (1994)
- 8) Williams, L., & Gill, D. L. : The role of perceived competence in the motivation of physical activity, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **17**, 363-378 (1995)
- 9) Williams, L. : *Goal orientations and on athlete's sources and interpretations of competence information*, Unpublished Master's Thesis, University of Oregon, Eugene (1991)
- 10) Deci, E. L., & Ryan, R. M. : *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*, New York : Plenum Press (1985)
- 11) Frederick, C. M., & Ryan, R. M. : Differences in motivation for sport and exercise and their relations with participation and mental health, *Journal of Sport Behavior*, **16**, 124-146 (1993)
- 12) Goudas, M., Biddle, S., & Fox, K. : Perceived locus of causality, goal orientations and perceived competence in school physical education classes, *British Journal of Educational Psychology*, **64**, 453-463 (1994)
- 13) Chatzisarantis, N., & Biddle, S. : *A self-determination theory approach to the study of intentions and the intention-behavior relationship in children's physical activity*, Unpublished Manuscript, University of Exeter, UK (1996)
- 14) Pelletier, L. G., Fortier, S. M., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Brière, N. M., & Blais, M. R. : Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sport : The Sport Motivational Scale (SMS), *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **17**, 35-53 (1995)
- 15) Vallerand, R. J., Pelletier, L. G., Blais, M. R., Brière, N. M., Senécal, C., & Vallières, E. F. : The Academic Motivation Scale: A measure of intrinsic, extrinsic, and amotivation in education, *Educational and Psychological Measurement*, **52**, 1003-1017 (1992)
- 16) Chantal, Y., Guay, F., Dobрева-Martinova, T., & Vallerand, R. J. : Motivation and elite performance : An exploratory investigation with Bulgarian athletes, *International Journal of Sport Psychology*, **27**, 173-182 (1996)
- 17) Fortier, M. S., Vallerand, R. J., Brière, N. M., & Provencher, P. J. : Competitive and recreational sport structures and gender : A test of their relationship with sport motivation, *International Journal of Sport Psychology*, **26**, 24-39 (1995)
- 18) Losier, G. F., & Vallerand, R. J. : The temporal relationship between perceived competence and self-determined motivation, *Journal of Social Psychology*, **134**, 793-801 (1994)

- 19) Vallerand, R. J., & Losier, G. F. : Self-determined motivation and sportsmanship orientations : An assessment of their temporal relationship, *Journal of Sport and Exercise Psychology*, **16**, 229-245 (1994)
- 20) 田中希穂 : 自己決定理論に基づく動機づけプロセスの検討, 博士論文, 同志社大学 (2004)
- 21) Sheldon, K. M., & Elliot, A. J. : Goal striving, need satisfaction, and longitudinal well-being : The self-concordance model, *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 482-497 (1999)
- 22) Duda, J. L. : Goal perspectives, participation and persistence in sport, *International Journal of Sport Psychology*, **20**, 42-56 (1989)
- 23) 松田岩男・猪俣公宏・落合優・加賀秀夫・山下剛・杉原隆・藤田厚・伊藤静夫 : スポーツ選手の心理的適性に関する研究 - 第3報 -, 昭和 56 年度日本体育協会スポーツ科学研究報告, 1-39 (1981)
- 24) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (Eds.) : *Handbook of self-determination research*, Rochester, NY : University of Rochester Press (2002)
- 25) Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. : The cognition-emotion process in achievement-related contexts, *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1211-1220 (1979)

(受理 2007 年 1 月 26 日)